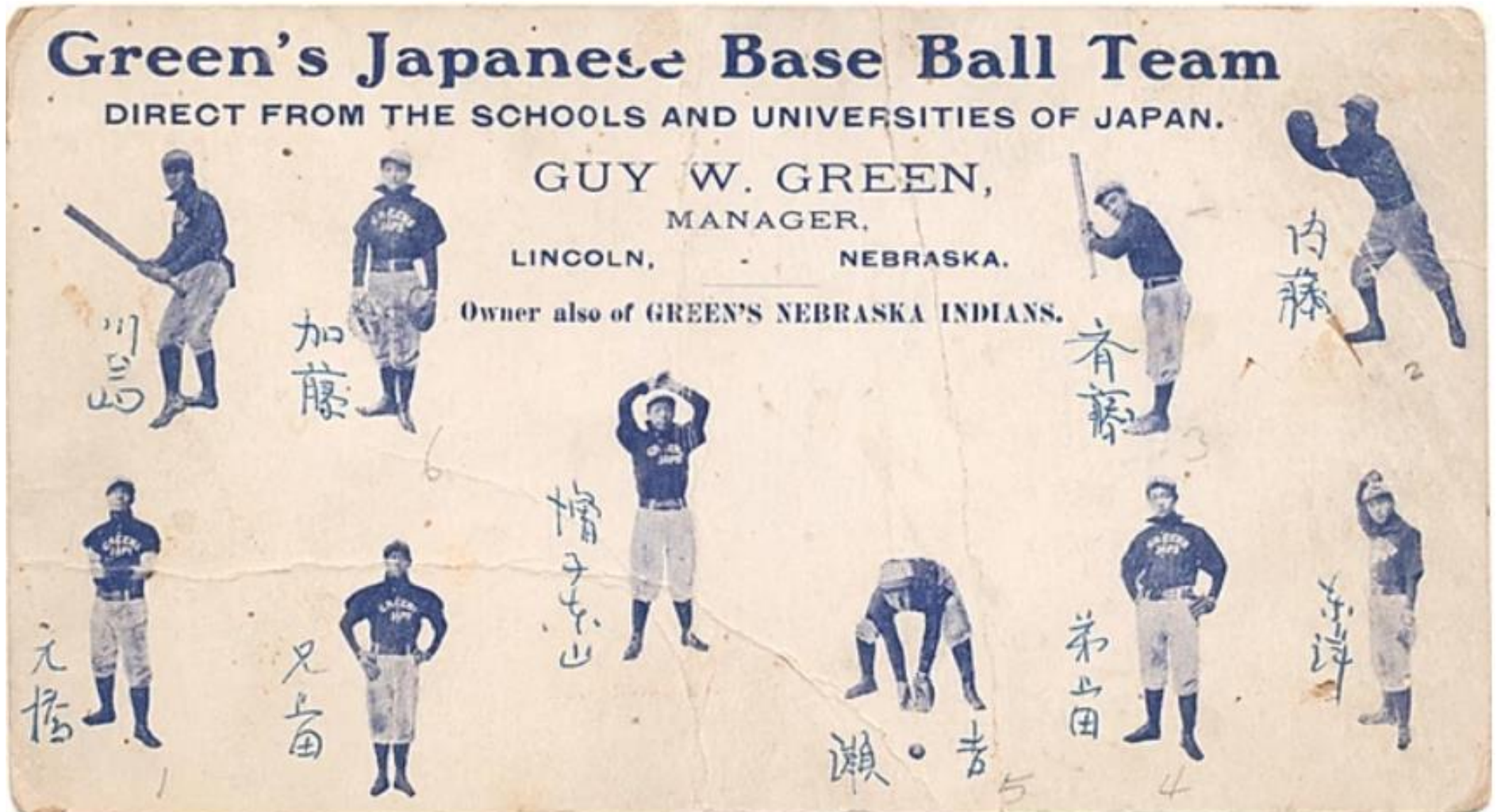


野球をしながら旅をして・・・

1906 (明治39)年：三神 吾朗 (All Nations) 以前の日本人「プロ」野球選手たち



〈 1906 Advertising Card, Ken Kitsuse Collection, National Baseball Hall of Fame 〉

イチロー選手や大谷選手など日本人選手のアメリカでの活躍は、世界の野球ファンを大いに楽しませてくれます。

そんな一流選手たちにあこがれて、多くの少年が「プロ」の野球選手をめざします。

今、これを読んでいるあなたも、こどもの頃に大観衆の前で球場を駆けめぐる自分の姿を想像したことが、一度はあると思います。

今回は、その「夢」を100年以上も昔にかなえていた“最初期の日本人「プロ」野球選手たち”について調べてみました。

冒頭にかかげた図版は、1906(明治39)年にアメリカでつくられた「**グリーンジャパニーズ**」という野球チームの広告カードです。

写真の**増子孝慈(東山)・吉瀬権・藤田東洋・齋藤義直(紅丹)・川島梅吉・元橋正一・上田哲三郎・上田潤二郎・加藤・内藤**・その他に、**税所篤義・Kimo・Nishi**の13人が、メンバーだったとわかっています。

実は、この選手たちこそが、最初期の日本人「プロ」野球選手でした。

はじめに、このチームの成り立ちから調べてみましょう。

1900年代初頭のアメリカでは、今につづく「大リーグ」とは別に、旅をしながら各地で興行として試合をする「プロ」の野球チームが数多くありました。

「**グリーンジャパニーズ**(Green's Japanese Base Ball Team)」もそんな独自巡業球団のひとつです。

チームは、1906(明治39)年4月、**ガイW.グリーン**(Guy W. Green)によって結成されました。本拠地は、ネブラスカ州リンカーン。

創設者の**グリーン**は、当時32歳の弁護士で野球好きな実業家でした。

その頃のアメリカでは、日本への関心が高まっていました。

日本が、ロシアと戦争(日露戦争)をしていることや早稲田大学野球部のアメリカ遠征などが、新聞でも大きくとりあげられていたからです。

たとえば、1905年には、「大リーグ」の有名監督が日本の「**スギモト**」選手(23)をスカウトし、正式に契約するだろうと報道されています。

「**スギモト**」選手は、「**キューバンジャイアンツ**」の外野手で、打撃もよく、走塁も巧みなレギュラー候補だとも言われていました。

実現すれば、最初の日本人「大リーグ」選手でしたが、肌の色などの理由から入団できませんでした。

グリーンは、このような時代の変化をビジネスのチャンスと考えました。増子 孝慈を雇い、監督のダントビー (Dan Tobey) とともに選手を集めさせ、ひとつの球団をつくります。

それが、「グリーンジャパニーズ」だったのです。

チームのメンバーは、ロサンゼルス日本人野球クラブを中心にして、太平洋沿岸各地より選ばれた、19歳から24歳の若者たち13人でした。

増子 孝慈 (東山)	投手兼マネージャー	福島県出身	24歳
	当時はロサンゼルス「羅府新報」紙につとめ日本人野球クラブの幹事		
吉瀬 権	遊撃手	宮崎県出身	23歳
藤田 東洋	投手兼外野手	茨城県出身	21歳
齋藤 義直 (紅丹)	投手兼外野手	「羅府新報」紙の主筆	23歳
川島 梅吉	外野手	神奈川県出身	23歳
元橋 正一	生年・出身地など不明		
上田 哲三郎	一塁手	山口県出身	20歳
上田 潤二郎	二塁手	哲三郎の兄 山口県出身	23歳
加藤	捕手		
内藤	三塁手兼外野手		
税所 篤義	捕手	宮崎県出身	23歳
Kimo	内野手		
Nishi	外野手		

メンバーは、4月上旬に本拠地のネブラスカ州リンカーンに到着します。少しの間、そこで巡業にそなえた練習をしたり、ホテルで長旅への準備をととのえたりしました。

合宿が始まって数日後、選手たちは、次のような契約書にサインをするよう求められます。

好ましくない行為についての罰金

飲酒	5 ドル
ギャンブル	3 ドル
一緒に球場へ行くことを拒否した場合	3 ドル
監督の指示に従わない場合	3 ドル
試合に遅刻した場合	2 ドル
怠慢なプレーをした場合	2 ドル

などの内容が書かれていました。

選手たちは、この契約書を一文字も読まずに、喜んでサインしました。誰もが正式に契約できず、送り返される心配をしていたので、内容まで確認する余裕はなかったようです。

日本人以外では、次のメンバーがいました。

ダン・トビー (Dan Tobey)

監督兼投手 27歳 ネブラスカ州ユリシーズ出身

サンディ・キセル(Sandy Kissell)

投手で外野手 コーチも兼任

セガン[セゴ](Seguin [Segol])

捕手

チャーリー・ファレル(Charlie Farrell)

一塁と三塁 愛称ドクター(Doctor)

4月下旬の数試合に出場

ルイス(Lewis) 7月から9月までの試合に出場

ロイ・ディーン・ウィットコム(Roy Dean Whitcomb)

地元リンカーン出身 18歳の白人内野手

ノイジー(Noisy)とも呼ばれていました

「グリーンジャパニーズ」は、1906年の春から秋にかけ、アメリカ中西部を巡業し、140試合以上のゲームを開催しています。

ただ、日本人選手で主に試合に出場していたのは、吉瀬、藤田、川島、元橋、内藤、上田哲三郎の6名でした。

あるメンバーは、自分の技術レベルを自覚して、その頃をなつかしみ、以下のような主旨の回想をのこしています。

「正直に言って、私より下手なのは、●●の他にいなかったんで、トビー監督が、私を下手だと思ったことをうらんではいない。(中略) 遠征には行けるが、試合にはだしてくれない。一人でロサンゼルスに帰ろうとも考えたが、チームを乱すことになるし、男らしい態度とは言えないと思い、残ることにした。」

「グリーン ジャパニーズ」の興行は、おおむね各地で好評でした。ゲームの相手は、地元クラブや高校生チームなどです。わかる範囲での試合成績は、143 試合 122 勝 19 敗(雨天中止 1、結果不明 1)。

入場料 25 セント・平均観客数は 400 人ほどで、巡業が終わるころには、およそ 12,000 ドル(今の日本円で約 3,600 万円)前後の総収入があったと思われます。

選手たちが、どれほどの報酬を受け取っていたのかは不明です。

1906年の10月上旬、巡業がおおると「グリーン ジャパニーズ」は解散し、メンバーは西海岸への家路につきます。

選手たちは、この遠征の旅で、つたなくても全力を尽くすことやチームに貢献することなどをつうじて、人としても成長していたようです。

また、多くの観客が入場料を支払い、お祭りのように楽しむ様子を見て、野球が「お金」になることも実感していました。

「プロ」の野球チームをつくろう！
前途洋々たる人生が目の前にありました。

増子 孝慈(ましこ たかのり)―日本人で最初の「プロ」野球チーム経営者

増子 孝慈は、1907年の初めに勤めていた新聞社の業務拡大のため、ロサンゼルスからコロラド州デンバーに転勤となります。

彼は、デンバーで有力な日系人の支援を受け、日本人が経営する最初の「プロ」野球チーム「**デンバー ロイヤル ミカド(Denver Royal Mikados)**」を創設します。

支援者たちは、野球をつうじたアメリカ人との交流によって、日系人の立場が向上することを願っていたようです。

けれども、若く生意気なほど大胆な増子は、最初から「プロ」のチームとして活動をはじめています。

たとえば、1908年のはじめ、彼は、すでに「プロ」チームの経営者として、各地の球団に試合を依頼する数多くの手紙を送っていました。そのなかで、増子は無礼なほど率直に「プロ」としての決意を書いています。

覚えておくべきいくつかの事実 (抜粋)

どんなことがあっても 私たちはゲームを投げません

いかなる場合にも 25セントより安い入場料で試合をすることはありません

私たちは慈善事業を行っているのではありません

ビジネスはビジネスです

真っ当なビジネスライクな方法で契約を守る覚悟がないかぎり私たちと契約を結んではいけません

各ゲームは それが行われるとすぐに決済されなければなりません シリーズ終了まで待つことは絶対しません

コロラド州デンバーの経営者 増子 “東山” 孝慈

増子の手紙は、よくもわるくも各地の新聞で大きくとりあげられるほどの反響がありました。

その結果、チームは、あるスポーツ会社の協力を得て、1908年4月から7月にかけて巡業できる見込みとなりました。

遠征メンバーは、

上田 哲三郎	一塁手	「グリーン ジャパニーズ」のメンバー
上田 孝友	右翼手	哲三郎の弟
川島 梅吉	二塁手	「グリーン ジャパニーズ」のメンバー
Geo Aoki	投手	
B. Iwasaki	投手	岩崎
E. Toda	投手	戸田
M. Ito	捕手	
D. Kimura	遊撃手	
B. Tada	三塁手	
Joe Katow	左翼手	加藤
W. Oya	中堅手	大屋
S. Sato	ユーティリティ	
T. Horiuchi	ユーティリティ	堀内
中村 保馬	マネージャー	

日本人選手以外では、

ロイ・ディーン・ウィットコム(Roy Dean Whitcomb)

捕手 「グリーン ジャパニーズ」のメンバー

ブース (Booth)

グリーン (Green)

リンデマイヤー (Lindemeyer)

ピットリング (Pitling)

などが参加しています。

「デンバー ロイヤルミカド」チームは、1908年4月に地元デンバーでの4試合から巡業にでました。

4月19日 ○ ミカド 5-4 コットレルズ クロージャーズ ●
4月20日 ● ミカド 3-7 デンバー大学 ○
4月21日 ● ミカド 4-12 セイクリッドハートカレッジ ○
4月22日 ○ ミカド 4-2 アマチュアオールスターズ ●

その後、「ミカド」チームは旅を続けて、5月の中旬には、ミズーリ州レキシントンにやってきました。

5月18日 ○ ミカド 4-0 ホワイト マーチャント ●
5月19日 ● ミカド 2-18 レキシントン タイガース ○

ここまでの試合成績は、22ゲームで9勝12敗(結果不明1)でした。

増子たちは、今後の試合に希望をもって意気込んでいたことでしょう。しかし、5月下旬から6月にかけて、遠征先のミズーリ州・カンザス州に例年の2倍以上もの大雨がふり、川があふれ洪水となり街を襲いました。

周辺の畑や球場は水浸しとなり、多くの人が家をなくし、100万ドルの被害があったとも言われています。

この豪雨のため「ミカド」の巡業は、突然におわってしまいました。

「ミカド」チームは現地で解散となって、メンバーたちは知人の助けも借りて、ようやく家に戻ることができました。

その後、増子は別の新聞社に移りますが、各地で審判員をつとめるなど野球にかかわり続けます。

また、「ミカド」チームは増子の手を離れて、1911年に上田哲三郎をキャプテンとするアマチュアクラブとして再結成されています。

税所 篤義(さいしょ あつよし)―日系人野球の基礎をつくったパイオニア

税所 篤義は、1906年10月に巡業がおわり、ロサンゼルスに帰ると、仲間とともにアマチュアの社会人チームをつくります。

球団名は、「南加日本野球倶楽部(Nanka Japanese Base Ball Club)」。 「南加(Nanka)」は、南部カリフォルニアの略称で、数年後に「プロ」となる日をめざしていました。

メンバーのひとり、当時の思い出を次のように語っています。

「若いころは、日曜日や休日に野球をすることほど面白いことはありませんでした。野球に夢中でしたから、どんなに良い条件の仕事でも、日曜日が休めない仕事にはつきませんでした。」

けれども、その頃は、日本人への差別や暴力がはびこり、地域の公式なリーグには加盟できませんでした。そこで、白人やアフリカ系、あるいはラテン系のアマチュアチームとの練習試合で腕を磨いていきました。

1908年になると、かれらは、野球に集中するためにロサンゼルスの下町に家を借り、合宿生活をはじめました。

税所たちの練習の成果は、その年の7月4日（アメリカ独立記念日）に行われた日米野球で証明されることになります。

かれらは、19-3のスコアでアメリカ人チームを圧倒したのです。

翌日の新聞は、税所たちのチームを大きくとりあげ「驚くほどゲームを知っている」と称賛しています。

税所は、この試合の勝利で「南加(Nanka)」チームを独立した「プロ」のチームにしようと決意しました。

また、1908年の冬には、橋戸信(早大の元主将)を迎えるなど選手の強化も着々と進みます。

さらに、チーム名も「**日本野球協会(Japanese Base Ball Association)**」と改称。略して「**J B B A**」となりました。

1909年の春になると、「**J B B A**」は「プロ」としての準備を整え、地域の強豪チームに挑みます。

4月17日 ● J B B A 0-17 リバーサイド ○

4月18日 ● J B B A 3-9 L A ジャイアンツ ○

4月22日 ● J B B A 9-15 ロサンゼルス高校 ○

けれども、結果は3試合とも大敗。しかも、盗難の被害にもあい、このときは、本当の「プロ」チームとしての活動は実現しませんでした。

その後、メンバーは入れ替わりますが、**税所**は「プロ」化をあきらめていませんでした。

まず、1910年には「プロ」としての実力をあげるため、近隣のチームに呼びかけ日本人チームだけのリーグを結成しています。(JBBA、日本、ハリウッド桜、隼人/三州の4チームが参加)

また、巡業資金をつくるため、支援者たちに協力を求め、相撲や演劇の興行を企画し、その利益をたくわえていきました。

一説によると、**税所**は、チームのために自分の土地を担保にし、資金を集めたとも言われています。

こうして、「**J B B A**」は、1911年の春から、いよいよ誰もが認める「プロ」の野球チームとして巡業の旅に出ました。

このときのメンバーは、

税所篤義	監督・プロモーター	Atsuyoshi "Harry" Saisho	(mgr)
杳田彦次	投手	Hikoji Mokuda	(p)
藤田東洋	一塁手	Toyo Fujita	(1b)
元橋正一	二塁手	Shoichi Motohashi	(2b)
鈴木喜一	三塁手	Kiichi "Onitei" Suzuki	(3b)
吉瀬權	遊撃手	Ken Kitsuse	(ss)
川島梅吉	外野手	Umekichi "Kitty" Kawashima	(of)
久保卓爾	外野手	Takuji Kubo	(of)
曾原實	外野手	Minoru Sohara	(of)
白石理一郎	ユーティリティ	Riichiro Shiraishi	(utility)
立山徳太郎	ユーティリティ	Tokutaro Tachiyama	(utility)
鹽満計佐一	マネージャー	Kesaichi "Arthur" Shiomichi	(mgr)

日本人以外では、

ジェームズ・G・ブレイン	(オヤマ)	James G. Blain	(Oyama)
ホバート	(オヤマ)	Hobart	(Oyama)
ケントン		Kenton	
ルイス・ロックハート	(フシマ)	Louis Lockhart	(Fushima)
A. S. パディラ	(ヤマ)	A. S. Padilla	(yama)
シールズ		Shields	
ウィリアム・ワトキンス	(ナーガ)	William Watkins	(Naga)
ウィーラー		Wheeler	

などが参加しています。

「JBBA」チームの巡業は、1911年4月から9月までの約半年間。

遠征地は8州(カリフォルニア、アリゾナ、ニューメキシコ、コロラド、カンザス、ミズーリ、イリノイ、アイオワ)におよび、約6,400 kmの旅をして、130試合以上のゲームをしています。

これまでにわかっている試合の成績は、139試合25勝63敗2分(雨天中止6、ノーゲーム1、結果不明42)。

総観客数は24,000人以上でしたが、総収入は約4,500ドル(今の日本円で約1,350万円)ほどと考えられています。

これは、「グリーン ジャパニーズ」チームの3割程度にすぎません。

しかし、「JBBA」のメンバーたちは、確かに「プロ」の野球選手でした。それは、かれらを取りあげた数多くの新聞記事が教えてくれる間違いない事実なのです。

9月の後半になると長雨で試合ができず、お金も底をつきました。その結果、チームは解散となり、メンバーはロサンゼルスに帰って行きました。

税所は、この遠征の後に現役を引退し、農業に専念していきます。

また、「JBBA」は、1914年までに、ほぼすべての選手が他のチームに移り、ロサンゼルスから去ったため、活動を終了しています。

なお、1911(明治44)年には、日本からふたつの学生野球チームが、アメリカに遠征していました。

ひとつは、早稲田大学チーム。シカゴ大学の招きで渡米して、4月から7月にかけて54試合17勝36敗(中止1)の成績でした。

メンバーには、のちに「All Nations」で二人目の日本人選手となった三神吾朗もいました。

もうひとつは、慶應義塾チーム。ウィスコンシン大学に招かれて、5月から8月にかけて、53試合30勝20敗2分(中止1)という結果でした。

また、日本国内では8月に有名な「野球害毒論争」がまきおこります。それが、当時の日本野球界の現状でした。

1921年—ふたりのプロモーター 失踪と失意

「グリーンジャパニーズ」の巡業から十五年後—1921(大正10)年の秋。増子孝慈(40)と税所篤義(38)のふたりは、プロモーターとして祖国・日本の野球界とのかかわりをもちました。

増子孝慈は、「ミカド」チームなどでの経験をいかし、日本でスポーツに関係する仕事をしようと、1920年までに家族で横浜に移住しました。

その彼が、1921年8月に日本へつれてきたのが「スークアミッシュインディアンズ(Suquamish Indians)」と「カナディアンスターズ(Canadian Stars)」というふたつの野球チームです。

「スークアミッシュインディアンズ」は、ワシントン州のインディアン部族の強豪。「カナディアンスターズ」は、白人の「プロ」チームでした。

ここでは、おもに「スークアミッシュインディアンズ」について調べてみました。

増子は、チームが日本に着くとすぐに「スークアミッシュ」の巡業計画を新聞に発表しています。

「まずは、東京で早稲田・慶應・法政・立教などの大学生チームと試合をする。

その後は、明治大学とともに福島・盛岡・北海道を巡業してから新潟や長岡を経て、関西の強豪チームとの試合も計画している。

場合によっては、四国・九州・朝鮮・満州にも遠征する意気込みだ。」

けれども、この計画は増子流の「おおげさな宣伝」にすぎず、本当に予定されていたものではありません。

わかる範囲での「スークアミッシュ」の実際の遠征先とゲームの成績は、18試合で14勝3敗1分でした。(永田陽一氏の調査による)

08月28日	●	スークアミッシュ	0-10	明治大学	○	東京・三田綱町球場
08月31日	●	スークアミッシュ	0-20	カデ`イアン`スターズ`	○	東京・三田綱町球場
09月03日	●	スークアミッシュ	0-16	慶應大学	○	東京・三田綱町球場
09月12日	△	スークアミッシュ	2-2	龍ヶ崎中学	△	茨城・龍ヶ崎中学グ`ラウンド`
09月12日	○	スークアミッシュ	12-3	オール龍ヶ崎	●	茨城・龍ヶ崎中学グ`ラウンド`
09月15日	○	スークアミッシュ	7-0	オール水戸	●	茨城・水戸中学グ`ラウンド`
09月15日	○	スークアミッシュ	10-1	茨城県立商業	●	茨城・水戸中学グ`ラウンド`
09月17日	○	スークアミッシュ	19-2	宇都宮倶楽部	●	栃木・宇都宮市立南校グ`ラウンド`
09月18日	○	スークアミッシュ	9-1	オール福島	●	福島・福島中学グ`ラウンド`
09月19日	○	スークアミッシュ	11-7	コ`ン`マ`ー`シ`ャ`ル`倶`楽`部`	●	新潟・新潟野球協会グ`ラウンド`
09月20日	○	スークアミッシュ	5-0	オール新潟	●	新潟・新潟野球協会グ`ラウンド`
09月22日	○	スークアミッシュ	18-3	オーロラ	●	新発田・第16連隊営前練兵場
09月22日	○	スークアミッシュ	3-1	蒲門	●	新発田・第16連隊営前練兵場
09月25日	○	スークアミッシュ	7-0	平倶楽部	●	福島・磐城中学グ`ラウンド`
09月25日	○	スークアミッシュ	15-1	磐城中学	●	福島・磐城中学グ`ラウンド`
09月28日	○	スークアミッシュ	4-3	布哇日本	●	京都・同志社グ`ラウンド`
10月01日	○	スークアミッシュ	9-4	布哇日本	●	大阪・豊中球場
10月09日	○	スークアミッシュ	12-2	京都リ`エ`ント`倶`楽`部`	●	京都・岡崎公園球場

チームは、東京での試合には大敗していますが、それ以外のゲームでは、実力を示し、各地方への野球の普及と国際交流にも貢献しています。

しかし、増子の行動は最悪でした。

詳しい事情は不明ですが、彼は遠征の途中でチームのお金を持ち去って、失踪していたのです。

これにより、増子のプロモーターとしての活動は短期間で終わりました。その後、彼が表舞台に姿をあらわすことは二度とありません。

噂では、太平洋戦争中は郷里の福島に疎開していたとも言われています。

税所篤義は、1911年の「JBBA」の巡業を最後に現役から引退し、農業関係の仕事をしていましたが、およそ十年後に転機がおとずれます。

1920年に日本へ一時帰国していた**税所**は、**橋戸信**(「Nanka」時代のチームメイト)とあって、プロモーターとしてアメリカのチームを日本に招く企画をひきうけることになったのです。

当時の**橋戸**は、著名なスポーツ記者となっていて、設立されたばかりの「**日本運動協会**(日本国内で最初の「プロ」野球チーム)」の社長もつとめていました。

税所は、「**日本運動協会**」の後援をうけて、野球にかかわる仕事ができることをとても喜んでいました。

ある人は、その頃の彼を「意気衝天の勢い」であったと語っています。

税所が、日本につれてきたのは「**シャーマン インディアンズ Sherman Indians**)」という「プロ」のチームです。

この球団は、1905年に早稲田大学が初めて渡米したときに**橋戸信**や**河野安通志**などを相手に試合をしたこともありました。

税所は、ある雑誌の1921年6月号で「**シャーマン インディアンズ**」を次のように紹介しています。

「このチームは本年9月頃に来日するという噂があるが、もし来るとしたら大学チームとも必ず試合をするから面白い事だろう。このチームはアメリカ インディアン 大学で有色人種野球団において有名なものである。特長として 全選手がボールスピードに優れている点と紳士的試合ぶりがチームの生命としている」

「**シャーマン インディアンズ**」は、1921年9月に10人で来日します。

これまでに知られている「シャーマン インディアンズ」の日本での試合成績は、8試合2勝6敗です。(永田陽一氏の調査による)

10月08日	●シャーマンインディアンズ	1-2	スター倶楽部	○大阪・豊中球場
10月09日	●シャーマンインディアンズ	3-7	ダイヤモンド倶楽部	○大阪・豊中球場
10月10日	●シャーマンインディアンズ	6-10	大毎野球団	○大阪・豊中球場
10月15日	●シャーマンインディアンズ	5-6	シアトル朝日	○東京・芝浦球場
10月16日	○シャーマンインディアンズ	2-1	立教大学	●東京・芝浦球場
10月17日	●シャーマンインディアンズ	6-7	三田倶楽部	○東京・芝浦球場
10月22日	○シャーマンインディアンズ	6-5	商友倶楽部	●横浜・中島グラウンド
10月28日	●シャーマンインディアンズ	1-2	早稲田大学	○東京・芝浦球場

来日前の試合予定では、少なくとも12ゲームをおこなう計画でしたが、実際には8試合だけでした。それには、以下の理由が考えられています。

まず、予定されていた数試合が雨のために中止となりました。

そのうえ、「シャーマン インディアンズ」が「プロ」チームであったので、いくつかの大学からゲームを拒まれたとも言われています。

その頃の日本では、精神面を強調した学生野球が中心となっていたため、人々を楽しませる「職業としてのベースボール」は軽視されていたのです。

その結果、「シャーマン インディアンズ」の巡業は試合成績も興行収入も満足できないものでした。しかし、選手たちへの報酬は200ドル(今の日本円で約40万円)ずつ支払われています。

税所は、この企画が成功しなかったため、貯蓄をつかいはたし、失意のうちにロサンゼルスに戻っていきました。

その後、第二次世界大戦中には、コロラド州アマチュアの強制収容所に、家族で抑留されています。税所篤義は、1976年に亡くなりました。

最初期の日本人「プロ」野球選手たちのプロフィール

ここでは、最初期の日本人「プロ」野球選手たちのなかから数人の略歴を紹介します。

ましこ たかのり
増子 孝慈

1881年 福島県出身 1896年 渡米 没年:不明

さいしょ あつよし
税所 篤義

1882年 宮崎県出身 1976年 没 (享年95)

1903年 21歳の年に渡米

うえ だて つさぶろう
上田 哲三郎

1886年 山口県出身 1956年 没 (享年71)

1904年 18歳の年に渡米

1941年 FBI にスパイ容疑(冤罪)で逮捕

1945年 釈放

ふじた とうよう
藤田 東洋

1884年 茨城県出身 1959年 没 (享年75)

1900年 16歳の年に渡米 (本名: 藤咲一郎 Ichiro Fujisaku)

ないとう こうじ
内藤 光次

1886年 大阪府出身 1957年 没 (享年72)

1904年 18歳の年に渡米

1912年 「All Nations」で最初の日本人選手となる

明治時代にアメリカへわたり、「職業としてのベースボール」を体験した名もなき若者たちがいました。

かれらは、「祭りのように楽しむ野球」を祖国に広めようともしました。けれども、当時の日本では、「魂の野球」が極端に重視されていたため、「楽しむ野球」は受け入れられませんでした。

かれらは、早すぎたヒーローだったのかもしれませんが。

野球をしながら旅をして…かれらは、「プロ」の野球選手という未知の仕事とであい、喜びだけでなく、人生のながさもあじわっていたのです。

最後に、三神 吾朗(All Nations)以前の日本人「プロ」野球選手に関するおもな出来事をまとめておきましょう。

1897年 「クリーブランド スパイダース」が日本人選手と契約する可能性がある」と報道される (プロレスラー:松田空吉の異母兄弟?)

1905年 「Shumuza Sugimoto」(23)が「ニューヨーク ジャイアンツ」マグローウ監督にスカウトされ正式に契約かと報道される

アメリカ遠征中の河野安通志(早大)が「タコマ タイガース(コーストリーグ所属)」から臨時の試合出場を打診される

1906年 13人の日本人選手が「グリーン ジャパニーズ」に加入し4月から10月にかけてアメリカ中西部を巡業する

税所篤義たちが「Nanka Japanese Base Ball Club」を結成

1907年 増子孝慈は日本人が経営する最初の「プロ」の野球チーム「Denver Royal Mikados」をコロラド州デンバーに創設

1908年 4月から5月「Mikados」チームがアメリカ中西部を巡業

1909年 「Japanese Base Ball Association」が「プロ」化をめざした活動を本格化(前身は「Nanka Japanese Base Ball Club」)

1911年 1月 大リーグ「カブス」のトライアウトにホノルル出身の「Ito Sugimoto」選手(21)が参加すると報道される

この年「ニューヨーク ジャイアンツ」の春季トレーニングに濱本東吾(本名:濱本 静修 Togo.S. Hamamoto) が参加

4月から9月「Japanese Base Ball Association」チームが「プロ」としてアメリカ中西部を巡業

1912年 シカゴの「内藤光次(K. Naito)」選手が「All Nations」に入団

1914年 三神吾朗選手が「All Nations」での活動をはじめる

◎主な参考文献

『南加日本人野球史』

赤堀 最(Masaru Akahori) / 編 1956年

『明治時代は謎だらけ』

横田 順彌(Jyunya Yokota) / 著 2002年

『ベーブ・ルースは、なぜ甲子園でホームランを打てなかったのか』

永田 陽一(Yoichi Nagata) / 著 2019年

『Issei Baseball : The Story of the First Japanese American Ballplayers』

Robert K. Fitts (ロバート・K・フィッツ) / 著 2020年

*ロバート・K・フィッツの website ⇒ 〈 <https://www.robfitts.com/> 〉

「A BASEBALL TEAM OF JAPANESE BOYS」(日本人青年たちの野球チーム)

「The frontier」(日刊「フロンティア」紙) 1906年04月05日付 06頁

「●野球消息」(シカゴの同胞野球家 内藤光次君は今春もセミプロ組に加入して各地を旅行するそうだ)

「紐育新報」(「Nyū Yōku Shinpō」紙) 1913年04月19日付 06頁

「PITCHERS DO SPLENDI WORK」(投手陣が躍動)

「The Omaha daily bee」(「オマハ デイリー ビー」紙) 1913年05月12日付 07頁

「米国三大選手 論評」在米国セントルイス市 上田哲三郎

「野球界」第09巻 第13号 (1919年 11月 01日発行)

「米国に於ける有色人種野球団」 税所篤義

「武侠世界」第06巻 第08号 (1921年 06月 発行)

「Baseball's first multiracial barnstorming team revealed in 105-year-old postcard」

By Simon Lindley(サイモン・リンドレー) 2018年07月05日

今回は 三神吾朗 (All Nations) 以前の
日本人「プロ」野球選手たちについて 少し調べてみました
みなさまのご意見 ご感想 新たな情報などもお待ちしております
最後までお読みいただき 誠にありがとうございました

2022(令和04)年08月15日

著者：弘田正典(野球史研究)

発行：スポーツ文献社